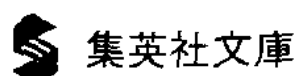


小説
会社
再建

高杉
良

「太陽を、つかむ男」





集英社文庫

しょうせつかいしやさいけん たいよう おとこ
小説会社再建—太陽を、つかむ男—

1991 年 7 月 25 日 第 1 刷

定価はカバーに表示してあります。

著 者 たか すぎ りよう
高 杉 良

発行者 若 菜 正

発行所 株式 集 英 社
会社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50

(3230) 6100 (編集)

電話 東京 (3230) 6393 (販売)

(3230) 6080 (製作)

印 刷 図書印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© R. Takasugi 1991

Printed in Japan

ISBN4-08-749733-X C0193

集英社文庫

小説

会 社 再 建

太陽を、つかむ男

高 杉 良



集英社版

(この作品は、昭和六十二年五月、角川書店より刊行された「太陽を、つかむ男」を集英社文庫収録に当たり、「小説会社再建」と改題した)

目次

第一章	非常呼集	六
第二章	安楽死の声	四三
第三章	作家の忠告	七七
第四章	大将の出番	九七
第五章	饅頭事件	二一九
第六章	幹部研修	二六四
第七章	辞表提出	二二〇
第八章	スト突入	二五五

第九章	大将倒れる	………	二八九
第十章	奥道後の決意	………	三五二
第十一章	創作ノート——解説にかえて——	………	三九五

小説会社再建―太陽を、つかむ男―

第一章 非常呼集

1

松山市北持田^{きたもちだ}の坪内^{つばうちひさお}寿夫^{しゅふ}邸^{てい}に、日本商工会議所会頭の永野重雄^{ながの しげお}が秘書の西堀^{にしほり}を伴^{ともな}つて訪ねて来たのは、昭和五十三年五月五日金曜日、午後二時過ぎのことである。来島^{くるしま}どつくを中核とするグループ百数十社を率いるオーナー経営者の坪内には、日曜も祭日もない。この日も、引きも切らず来客が続いていた。来客といっても、ほとんどが関連企業の幹部社員である。平日より時間を割^さいてもらえるから、休日^{きゅうじつ}に自宅へ押しかけて来る者が少なくない。連絡を密にせよ、と坪内は社員に厳命^{げんめい}している。瑣事^{さじ}瑣末^{さまつ}と考えられることがらでも、ときとして大局に影響を及ぼす問題が潜^{ひそ}んでいないとも限らないので、万遺漏^{ばんいろう}無きを期^きせと言^いうわけであろう。

坪内は、部下の意見、提案に熱心に耳を傾けるし、よかれと判断すれば直ちに採用するが、判断の正確を期^きするためにも、情報^{じほう}は多いに越したことはないといつねづね考えている。

大ぶりの赭^{あか}ら顔で、耳、鼻、口の造作^{ぞうさく}がやたら大きいのが、細い小さな眼と奇妙なバランス

を保っている。眉毛と眉毛の間隔が広く、異相というより福相で、親しみを持たれる顔だ。居間のソファで佐伯正夫と話している坪内は浴衣がけだが、佐伯はスーツに身を包み、ネクタイも着用している。

佐伯はこの日五人目の来客だが、重要事項の報告は済み、雑談になっていた。

「昨日、知事の記者会見に今年採用したばかりの女性記者を取材に出しよりました。つね日頃から一番前の席に座れと言うてますが、そしたら、うしろからほかの記者に、女子のくせになんや！ どかんか！ といわれ、しょげて帰ってきおったんですわ。悔しいと言うてベソを掻いてました」

「可哀相なことをしたな。めしでも食うて慰めてあげなさい」

多汗症の坪内は、会社でも家でも冷たいおしほりを片時も離さないが、顔の汗を拭きながら眼のあたりをこすったところを見ると、眼がしらが熱くなっていたのかもしれない。坪内には涙もろいところがある。

佐伯は、まだ三十三歳の若さだが、「日刊新愛媛新聞」の取締役総局長として、実務面を担当している責任者だ。

観光、映画、ホテル部門も受けもたされているが、仕事がめしよりも好きで、一年三百六十五日、一日も休日を取らないという変りダネである。坪内好みの猛烈社員で、佐伯の真似をできる者は一騎当千の来島マンの中にもさすがに一人もいない。

「女性記者を活用しろというオーナーのアイデアは、目下のところすこぶる好評です」

「そうじやろう」

坪内がうれしそうに返したとき、お手伝いの佳子よしこが居間へ入って来た。佳子は、妻の紀美きみ江の遠縁で、今年二十二になる。色白で眼鼻だちのはっきりした娘だ。

「永野さんとおっしゃるかたがお見えです」

「永野さんって、永野会頭のことかね」

「さあ。お年寄りのかたです」

「こんなところへ、永野さんが見えるわけがないじやろう？ どちらの永野さんか訊いてくれんか」

「はい」

佳子は、ほどなく今度は名刺を一枚持って引き返して来た。見ると「新日本製鉄株式会社取締役相談役・名誉会長永野重雄」とある。ソファから起ちあがって、坪内の手にある名刺を覗き込んだ佐伯が調子の外れた声を洩らした。

「ほんまに永野会頭ですね。どうしましうか。わしがおらん言うてきましうか」

「そうもいかんじやろう」

坪内はかすかに眉宇びうをひそめた。佐伯が居留守を提案したのは、坪内が永野に会いたくない理由を承知していたからだ。いわば永野は、坪内にとって招かざる客であった。

「永野さん、お一人か」

「いいえ。お二人です」

「とにかく応接間へ案内してお茶を出しなさい。紀美江はまだ帰らんのか」
 「間もなくお帰りになると思います」

佳子が廊下を小走りに立ち去って行く足音を聞きながら、坪内は「三時以降の予定をキャンセルするよう秘書に命じ、「永野さんも熱心なことじゃのう」とひとりごちてから、百キロの巨体をゆすぶるように寝室に運び、浴衣をワイシャツとダブルのスーツに着替えてから応接間へ顔を出した。

永野が、五月の連休にわざわざ来松したのは、なんとしても佐世保重工業（SSK）の経営を坪内に引き受けさせたいと考えていたからである。

経営危機に直面している佐世保重工業の救済問題が表面化したのは四月初めだが、第一勸業銀行を幹事会社とする銀行団と、来島どつく、日本鋼管、新日本製鉄、日商岩井の四大株主間の思惑、利害が複雑に絡み合って、いまだに漂流を続けている。長崎県、佐世保市の地元自治体、および福田政権を巻き込んで、SSKの救済策が模索されていたが、調整役に担ぎ出された永野は、坪内をSSKの社長に引っ張り出し、経営主体を確立することが先決だと考えていた。もちろん、希望退職者千六百余人の退職金八十三億円をいかに工面するか、この債務保証をどうするか、再建計画の具体的なプログラムをどう固めていくかなど難問を抱えているが、坪内さえ首をタテに振ってくれば、再建に向けて体制を整備することはできると読んでいた。そのために、坪内がSSKの経営を引き受けられる環境づくりを永野なりにすすめてきたつもりだった。

もちろん、永野はアポイントメントも取らずに坪内を訪ねて来たのだが、万一、坪内が留守で、会えなくても、情誼じやうぎに厚い坪内のことだから、そのことを多としてくれるはずである。ここまでやって、坪内があくまで拒否し続けるなら、そのときはきっぱり諦めあきらよう、と肚はらを決めていた。

ノックの音が聞こえ、坪内の巨体が応接間にあらわれた。

「やあ、お休みのところを恐縮です。ちよつとそこまで来たんで、寄らしてもらいました」秘書を帯同して松山くんだりまでやって来て、ちよつとそこまでもないもんだ、と思いがらも、永野のそのひとことで、坪内は氣持がほぐれ、永野の差し出した手を笑顔で握り返した。

「お待たせして申し訳ありません」

「門前払いを食わされると思ひましたよ」

「失礼しました。まさか永野さんが見えになるとは思ひませんでしたから。さあどうぞお座りください」

腰をおろしかけた秘書の西堀が「つまらんものですが」と包みをテーブルに乗せた。

「ありがとうございます」

「会頭、わたしは席を外してましようか」

と、西堀が中腰の姿勢で永野のほうをうかがった。

「うん。そうしてもらおうか」

「わたしのほうは構いませんがな」

「いや、坪内さんと内緒話もしたいから、外してもらおうか」

「そうですか」

坪内は、佳子を呼んで、西堀を別間に案内させた。

二人になったところで、坪内が言った。

「こんな田舎の陋屋へよくお出でくださいましたなあ」

「さすがは坪内さんじゃ、空港でタクシーを拾って、坪内寿夫さんのお宅と言ったら、すぐ運んでくれましたよ。なかなか風情のあるいい家じゃないですか」

永野は、あたりを眺めまわしながらお上手を言ったが、「四国の大将」にしては質素なたずまいに内心びっくりしている。

日本銀行松山支店長の旧役宅を買い取ったのだが、昭和初期の建築だから、相当な年代ものと言える。柱は太くて立派だし、ガタがきているというほどのこともないが、隣接地に建てられた瀟洒な現役宅とはまことに対照的である。一年前まで、坪内夫妻は北持田から徒歩十分ほどの一番町に住んでいたが、訪ねて来た客が探しあてるのに苦労するほど文字どおりの陋屋だった。

永野が緑茶をひと口すすって、さりげなく切り出した。

「坪内さんは、醜女の深情けだと思ってるんでしょう？ 迷惑千万でしょうが、どう考えてもあんたしかおらんのです」

きたな、と坪内は思った。

先月二十七日に東京で会ったときも、永野は坪内をかき口説いた。

「天下国家のためにひと肌脱いでくださいよ」

「佐世保重工の経営責任者になれるのは坪内さんを措いてほかにいません」

「あなたが受けてくれないと、僕は日商会頭を辞めなければならぬ。僕を男にしてくださいよ」

財界の大御所といわれる天下の永野重雄がそこまで言つて、頭を下げたのである。しかし、坪内は受けなかった。

「永野さんの熱意とご努力にはいくら感謝してもし切れるものではありません。しかし、日本鋼管と第一勧業銀行が前面に出るべきです。それが筋というものです」

つい一週間ほど前のことだが、あのときの永野の、なんとも切なそうな顔が思い出される。また、同じシーンを繰り返さなければならぬのか——そう思うと坪内は胸がふさがつてくる。

「永野さんにお会いした次の日じゃったから先月の二十八日じゃったと思いますが、中村次官と謝敷局長に、お受けしかねるとお伝えしました。わたしとしては最後通告のつもりです」

坪内のいう中村次官とは、運輸省事務次官の中村大造のことであり、謝敷局長は同省船舶局長の謝敷宗登を指している。事実、このことは四月二十九日付で各紙にとりあげられた。

例えば、「日本経済新聞」は次のような坪内の談話を掲載している。

永野さんは私に佐世保重工業の経営をやってほしいようだったが、私はきょう（二十八日）運輸省の中村次官に佐世保重工業の経営に乗り出さないことを伝えた。三年前なら、経営を引き受けられたが、今のようになつてしまつてからではできない。もし、経営を引き受けたら、来島どつくの業績にも悪い影響が出てしまう。

「坪内さんが受けてくれなければ佐世保は潰れますよ」

「いままでの経緯いきさつから言つても、日本鋼管が出るのが筋です。榎田社長を口説いてくださ
い」

「坪内さん、本気ですか。仮りに榎田君が受けてくれたとして、佐世保重工業を再建できると
思いますか。思つとらんでしょうが」

「……………」

坪内は言葉に詰まつた。八十三億円の融資について第一勧銀などの銀行団が大株主四社に保証を求めているのは、再建の見通しを厳しくみているからでもある。四十八年末の第一次オイルショック後、造船不況は日増しに深刻の度合いを深めている。坪内が率いる来島どつくグループは、厳しい合理化努力によつて、不況を乗り切つたし、今後も生き残れる自信はあるが、造船部門を持つ日本鋼管は、主力の鉄鋼部門の不振もあつて、経営が悪化している

と伝えられている。おそらく、佐世保重工どころではあるまい。それ以上に坪内は社長の槇田久生たひさおの経営手腕を評価する気になれなかった。佐世保重工を再建できる者がおるとしたら、わししかおらん――。

永野は、坪内の胸中を忖度そんたくしていると見え、ここを先途せんどと語勢を強めた。

「仮定の話をしても始まらないう。槇田君は、佐世保の再建に乗り出すつもりは毛頭ないんです。だいたいあの男は、誠実さが不足している。それに佐世保が潰つぶれたらどうなりですか。佐世保の倒産が引き金になって瀬戸内周辺の中小造船所は将棋倒しです。軒並み倒産しちゃいますよ。佐世保市は潰滅かいめつ的な打撃を受けるでしょう。地域社会、地域経済の混乱にとどまればまだいいが、造船大手の一角が崩れれば、日本全体の景気回復に水を差す結果になりますよ。大変な社会問題です。坪内さんは佐世保の株式の二五パーセントを保有している。四十五億円の資本金の二五パーセントなら十一億円強だが、株を買ったときは三倍以上してるでしょうが。三十億円以上の株が紙クズになってしまっているんですか」

「それは仕方がないですよ。ひと様に迷惑をかけるわけではなく、わたしが損するだけですから……」

坪内は苦笑したが、すぐに表情をひきしめた。

「わたしは筆頭株主でありながら、経営上のことで口出したことはただの一度もありません。いや、口を出させてもらえなかったのです。三年前、白洲次郎しらすじろうさんの斡旋あつせんで、大洋漁業の中部なかべさんから、佐世保の株を買ったとき、佐世保の経営を頼まれ、会長になってくれと言

われたので、お受けしたら、榎田さんはいったんは了承しておきながら断わってきました。わたしにあの時点で佐世保の経営をやらせてもらったら今日のようなていたらくにはしてません。村田社長にしても、中間配当を実施しておきながら、期末で無配にする始末です。こんなでたらめな経営姿勢がありますか」

坪内は顔を真っ赤に染めて話している。

永野は、じっと耳を傾けていたが、初めて聞く話ではなかった。しかし、辛抱強く聞いていた。坪内の無念な気持は痛いほどよくわかる。

「榎田さんは卑怯ひきようですよ。鋼管から社長を出しておきながら、鋼管とは無関係とは、なんていう言いぐさですか。わたしの会長就任を拒否した鋼管がこの期に及んでわたしに佐世保の社長をやれとはよう言えんでしょうが。永野さん、どう思われますか」

「……………」

永野は、黙ってうなずくしかなかった。榎田に対する坪内のわだかまりは相当根が深い。三年前、自分に佐世保をまかせてくれれば、こんな経営危機を招くことはなかったのに、と切齒扼腕せつしやくわんする思いなのである。

「永野さんのお心をわずらわせて、ほんとうに申し訳ないことですが、家内も、会社の幹部も、来島どっくのメインバンクも、みんな佐世保の経営を引き受けることに反対してるんです。わたしも、経営を引き受けないと中村次官に伝えました。じゃから、みんなホッとしてます。せっかくお出でいただいたのに、お役に立てなくて申し訳ありませんが、奥道後の温おくどうご